群教セ	G10 － 01
	令 2.275 集
	道徳

中学校道徳科において 多様な考えを基に、人間としての 生き方について考えようとする生徒の育成

――立場を明確にするカラーコップを使用した話合いの工夫――

特別研修員　天田　智之

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

「学校教育の指針」（群馬県教育委員会　令和２年度）では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を目指している。また、道徳の授業改善のポイントとして「内容項目について特に大切にしたいことに児童生徒が気付くことができるよう、多様な考えを引き出す中心発問と考えを深める補助発問を構成する」ことが大切であるとされている。

道徳の授業において話合い活動を行うと積極的に発言をする生徒は少なく、受け身の姿勢になっている生徒が多い。また、話し合った後の道徳的価値の理解に深まりが見られない生徒もいる。

そこで、カラーコップで生徒の立場を明確にして、気になる生徒の意見を生徒たち自身が取り上げることで互いの問いが生じ、生徒同士の話合いが活発になると考えた。その後、教師から「でも」「どうして」「本当に」「できるかな」等の道徳的価値の理解を深める揺さぶりの発問を行い、深く内省させていきたい。そして、自らの生活体験と関連付け、めあてに対して一人一人が納得できる答えを導き出すことが、最終的に人間としての生き方について考えようとする生徒の育成に繋がると考え、本研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図

２　授業改善に向けた手立て

多様な考えを基に、人間としての生き方について考えようとする生徒を育成するため、以下の二つの手立てを考えた。

手立て①　カラーコップを使用した生徒同士の話合い **手立て②　道徳的価値の理解を深める教師からの揺さぶりの発問**

手立て①について

中心発問や補助発問に対し、教師が三つの立場を三色のカラーコップとともに示す。生徒は自身の考えを基に立場を選び、その色のカラーコップを机上に置く。同時に、生徒はワークシートに自分の立場とその理由を記入する。互いのカラーコップの色を見て、気になる生徒の意見を生徒たち自身が取り上げて話し合う。話合いが活発になるとともに異なる立場の意見や同じ立場でも理由の異なる意見を問うことで、多様な考えに触れ、道徳的課題に対して多面的・多角的に考えることができると考えた。

手立て②について

生徒同士の話合いの中で、立場が異なる生徒の意見を基に教師が揺さぶりの発問をすることで、生徒は多様な考えに触れ、道徳的課題に対して多面的・多角的に考えることができるようになる。そして、自分の考えを広げることができ、道徳的価値の理解を深めることができると考えた。

さらに、教師から「でも」「どうして」「本当に」「できるかな」等の揺さぶりの発問をして、じっくりと内省させることで、道徳的価値について深く考え、多様な考えを基に、人間としての生き方について考えようとする生徒を育成できると考えた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　手立て①では、カラーコップを使用したことにより、互いの意見を瞬時に把握できるという点で、有効であった。立場を明確にすることで、生徒の中で立場の違い等に疑問が生まれ、異なる立場の生徒に考えを問うたり、同じ立場同士でも異なる理由を問うたりしながら、生徒同士の話合いが活発になった。

○　手立て②では、生徒同士の話合い活動の中で、立場が異なる生徒の意見を基に教師が揺さぶりの発問をしたことで、生徒は自分の考えに固執せずに多面的・多角的に考えることができた。さらに、教師から「でも」「どうして」「本当に」「できるかな」等の揺さぶりの発問をすることにより、自らの生活体験と関連付けて一人一人が納得できる答えを導き出すことができ、道徳的価値の理解をより深めることができたと考える。

○　教師が揺さぶりの発問をしたことにより、道徳的価値の理解を深めることができ、人間としての生き方について考えるきっかけとなった。

２　課題

○　手立て①に関しては、教師が一方的にカラーコップの立場を設定するのではなく、生徒の意見を聞いたり書かせたりした上でカラーコップの立場を設定することにより、より実態に即した話合い活動が展開できると感じた。

○　手立て①に関しては、互いの考えを聞くことにとどまってしまった。自分の考えの違いやその根拠を問うような話合い活動になると、道徳的価値の理解をより深めることができたのではないかと考える。

○　手立て②に関しては、教師からの揺さぶりの発問をいつ、どの場面で行うかで道徳的価値の理解の深まりが変わってくる。道徳的価値の理解をより深めさせ、生徒が自らの生活体験と関連させやすい揺さぶりの発問を教師が実態に応じて用意しておく必要がある。

実践例

１　主題名　　相手の立場で　内容項目Ｂ－（９）相互理解、寛容（第２学年・２学期）
　　教材名　　「なみだ」　東京書籍「新しい道徳２」

２　本主題について

(1)　ねらいとする道徳的価値観について

中学生の時期は、学年が上がるにつれて、ものの見方や考え方が確立してくる。しかし、自我意識も強くなるため、自分の考えや立場に固執して、他者の意見に耳を傾けたり、相手の立場を考えたりしようとせずに、自己中心的なものの見方や考え方をする傾向にある。

人は誰しも、苦しいときや辛いときには自分のことだけを考えてしまう。独りよがりの考えが強いと周囲とのトラブルに発展してしまうこともある。人にはそれぞれ自分のものの見方や考え方があり個性がある、ということに気付くことによって、自分とは異なる立場や考え方を尊重することができる。いろいろな立場や考え方を理解する寛容の心をもつ心情を育てたい。

(2)　生徒の実態について

この時期には、学級全体で話し合う場面で発言する生徒が限られ、他者の意見に安易に同調する姿が見られる。自分と他者の考えや意見の違いが明らかになることを恐れ、自分から相手に伝えることができないこともある。また、相手の考えとの差異があることを理解しつつも、考え方の違いから生徒同士の関係に摩擦が生じることもある。このような時期に、互いの個性や立場には違いがあって当然で、広い視野に立っていろいろなものの見方や考え方があるということを理解する姿勢を育てたい。

(3)　教材について

本教材は、学校でふとしたことから事故に巻き込まれた主人公が、こらえきれないほどの痛みややり場のない怒りゆえ、謝罪に来た加害者（Ｓ君）とその母親の涙を疑ってしまう。しかし、加害者親子が帰宅すると、主人公は冷静さを取り戻し、自己の痛みだけを思っていたときの自分の考えを反省するという物語である。そして、加害者親子を思いやり、けがに負けないよう自分を奮い立たせて、翌日は登校するという内容である。

生徒は、けがをした主人公の痛みと怒りに共感できるだろう。しかし、故意ではない事故であること、加害者親子が謝罪に訪れ涙を流して心から心配してくれた場面から、加害者親子の謝罪を素直に受け入れられるかを考えさせることによって自分と異なる他者の立場や考え方を尊重する態度を育てたい。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時では、加害者親子が主人公の被害者の家に謝りに来た場面と、けがをした翌日に登校した主人公がＳ君に接する場面における発問に対して、生徒に三色カラーコップを使用させ、立場を明確にさせた。この二つの場面で生徒一人一人の考えの違いをカラーコップによって互いに可視化させることで、生徒同士の話合いが活発になり、本時の道徳的価値に迫れるようにした。

展開前段での手立て①　カラーコップを使用した生徒同士の話合い（小グループ）

展開前段では、教師から三つの立場を提示し、どの立場かを三色カラーコップを用いて示させることで、生徒一人一人の立場を互いに可視化する。同時に、自分の立場とその理由をワークシートに記入させる。その後、小グループで、立場の違う生徒と意見を交流させる。

展開中段での手立て①　カラーコップを使用した生徒同士の話合い（全体）

ここでは、展開前段と同様、生徒一人一人の立場を互いに可視化できるようにした後、全体での話合いを行う。気になる生徒の意見を生徒たち自身が取り上げる生徒同士の話合いとなるようにする。立場が異なる生徒に問うこともあれば、同じ立場の生徒でも互いの異なる理由について問うこともある。

展開中後段での手立て②　道徳的価値の理解を深める教師からの揺さぶりの発問

生徒同士の話合いの場面において、立場が異なる生徒の意見を基に教師が揺さぶりの発問をすることによって生徒が多面的・多角的に考えられるようにする。さらに、教師から「でも」「どうして」「本当に」「できるかな」等の揺さぶりの発問をすることにより道徳的価値について深く考えられるようにする。

4　授業の実際

導入では、「友達に言い過ぎたり、傷付けたりしてしまったことはないか」と問いかけ、価値への方向付けを行った。次に、登場人物を押さえてから資料を範読した。

展開前段での手立て①　カラーコップを使用した生徒同士の話合い（小グループ）
発問：もし自分が主人公の立場だったら、謝りに来たＳ君や彼のお母さんのことを素直に受け入れられるか、受け入れられないか。その理由は。

展開前段で生徒は、上記の発問に対して三色カラーコップを使い「黄：受け入れられる」「緑：どちらとも言えない」「青：受け入れられない」のうち一つのカラーコップを机上に置き、自分の立場を明示した。同時に、その立場とその理由をワークシートに記入した。もし自分だったら、と自我関与させたことで、自分の考えをこれまでの経験とともに考えることができた。その後、小グループで立場が異なる生徒と意見を交流させ、多様な意見に触れた（図１）。

図１　小グループでの話合い

展開中段での手立て①　カラーコップを使用した生徒同士の話合い（全体）
発問：もし自分が主人公の立場だったら、大けがをした翌日、けがをさせた相手にどう接するか。

展開中段では、上記の発問に対して「黄：声をかける」「緑：どちらでもない」「青：声をかけない」のうち一つのカラーコップを机上に置き、自分の意見を明示した。また、その理由をワークシートに記入した。展開前段と同様に、自我関与させたことで生徒は自分事として考えることができた。その後の全体での話合いでは、気になる意見を生徒同士が取り上げて話合いを行った。異なる色のカラーコップを出している生徒に意見を問うたり、同じ色のカラーコップを出している生徒に理由を問うたりしていた。同じ色であっても考え方や理由が異なることもあり、生徒は様々な意見を交流することができた（図２）。

図２　全体での話合い

展開中後段での手立て②　道徳的価値の理解を深める教師からの揺さぶりの発問
立場が異なる生徒の意見を基に「でも」「どうして」「本当に」「できるかな」等の教師からの揺さぶりの発問で道徳的価値の理解を深めさせる。

展開中段での生徒同士の話合いの場面において、多くの生徒が「声をかける」「どちらでもない」であり、「声をかけない」と答えた生徒は数人だった。そこで、教師が「どちらでもない」と答えた生徒に対して「声をかける」と答えた生徒の意見を基に揺さぶりの発問で本当に自分の意見がそれでいいのか考えさせたり、「声をかける」と答えた生徒に対して「声をかけない」と答えた生徒の意見を基に揺さぶりの発問で再考させたりすることによって生徒が多面的・多角的に考えられるようにした。教師からの揺さぶりの発問により、ワークシートに記入された考えだけでなく、生徒は自らの生活体験と関連付けて道徳的価値について深く考えることができた。この場面では、以下のように揺さぶりの発問をした。

Ｔ：<u>どうして</u>「声をかけない」のですか？
Ｓ：相手も気まずいと思う。自分がけがをさせてしまった時は、話しかけてもらいたくないかなと思ってしまうから。
Ｔ：相手も気まずいだろうと考えるのですね。それに対してどう思いますか？気まずいから声をかけないと言っていますよ。

Ｓ：でも同じクラスで絶対に顔は見るわけだから、ずっと気まずい空気のまま過ごしていってしまうとけがが治った後でもその気まずさの関係が続いてしまうから、声をかけた方が良いと僕は思う。

展開後段では、めあての「広い心をもつとは、どういうことだろう。」についてもう一度考えた。生徒一人一人が自らの生活体験と関連付けて、自分と異なる他者の立場や考え方を尊重することについて考えることができた。発表された生徒の意見に対して、更に教師が揺さぶりの発問をした。

Ｔ：相手を思いやったりとか相手のことを考えたりとか相手の気持ちになるという意見が多いですね。でも、例えばこのお話の中の主人公は治療のとき、肉を切開し骨を削るくらいの大けがをしたんだよね。果たして、そんな大けがをした時に相手の気持ちを考えられると思う？本当にできると思う？

Ｓ：広い心をもつとは物事を一つの視点で考えたり見たり押し付けたりしないことだと思う。例えば、最初の場面でＳ君が下を向いている時も、人によってはごめんの一言もなくて反省してないように見えたり、人によっては下を向いているから申し訳ないと思っていると見えたり、感じ方は人によって違う。今回の肉を切開し骨を削る大けがもやっぱり自分が痛い思いをしたというので相手を許せないで実際そういう立場になったら相手のことを考えることもできなくなってしまうかもしれない。でも、そういう場合こそそんな大けがをさせてしまった相手の気持ちも考えたいなと思う（図３）。

図３　揺さぶりの発問に答える生徒

５　考察

手立て①では、自分の立場をカラーコップで明らかにすることで、自分と立場が異なる生徒に問う姿や同じ立場でも理由の異なる生徒にその理由を問う姿が見られた。カラーコップで考えを可視化するということは、互いの考えを瞬時に把握でき話合い活動を活発にするという点で有効な手立てであった。カラーコップというツールを使うことで、生徒同士の主体的な話合い活動を行うことができたと考える。生徒同士の話合いは以前より活発になったが、今後は更に生徒の力で深め合えるような話合い活動を目指していきたい。そのためには、今回教師が行った「でも」「どうして」「本当に」「できるかな」等の揺さぶりの発問を生徒同士で行えるとより質の高い話合い活動になると考える。その土台には、素直に何でも言い合える学級内の人間関係を構築していくことが重要になると考える。

手立て②では、異なる立場の生徒の意見を基に教師が揺さぶりの発問をしたことで、生徒は多面的・多角的に考えることができた。さらに、教師から「でも」「どうして」「本当に」「できるかな」等の揺さぶりの発問をしたことによって、ワークシートに記入した考えを自らの生活体験と関連付けてもう一度考え直すことになるので、道徳的価値の理解を自分事としてより深めることができたと考えられる。これは、今回の研究テーマである「人間の生き方について考えようとする生徒の育成」に繋がった。道徳的価値の理解を深めるために、実態を把握して、生徒の考えを予想して、実態に応じた揺さぶりの発問を教師が用意しておくことが大切である。

カラーコップの活用については、生徒の考えを可視化する点においては効果的であったが、生徒が自分事として考えられるような立場を示さなくてはいけない。そのために、教師が一方的に立場を提示するだけでなく生徒の意見を聞いたり書かせたりした上でカラーコップの立場を設定する方法も今後実践していきたい。カラーコップを上手に活用するためには、使用場面を精選し、揺さぶりの発問と連動させながら生徒が自らの生き方について考えることができるようにしていく必要がある。